

声 楽

国土潤一

今回も聴いたものからの選択羅列になる。

1月21日には「B→C」でのソプラノの松島理紗を聴く（東京オペラシティ リサイタルホール）。桐朋学園からウィーンを経て、現在ドイツの現代音楽の現場で活躍している人物で、高い声楽技術に支えられた鮮やかな歌唱。この数十年での日本人声楽家の発声技術の進歩、向上をまざまざと感じる。

1月25日には「仲道郁代 言葉を奏でる」と題したシリーズの初回を聴いた（HAKUJU HALL）。バリトンの加来徹をソリストとして、ベートーヴェンの「遙かなる恋人に寄せて」とシューベルトの「白鳥の歌」を核としたプログラム。声楽家がソロ・ピアニストを選ぶのではなく、ピアニストが声楽家をチョイスしてプロデュースするのは、内田光子やマリア・ジョアン・ピリスなどの前例もあるが、その国内ヴァージョン。仲道のドイツ語能力があつての企画であるし、声楽界の「黒船」として、今後も注目すべきシリーズとなるだろう。

3月19日には「東京・春・音楽祭」の一貫としてクリスティアン・ゲルハーエルとゲロルト・フーバーによる「シューマン・プログラム」を聴いた（東京文化会館・小）。昨今は少なくなったドイツ・リートコンサートを求めて多くの聴衆が詰めかけていた。客席は大いに沸いていたが、フィシャー＝ディースカウやヘルマン・プライ、ペーター・シュライアーらのドイツ・リートを知る筆者の世代にとっては、声楽技術の向上に反して歌唱内容の真摯さ、切実さに虚飾を感じずにはおれない。ドイツ・リート界の変容こそが、このジャンルの或る種の衰退の原因なのかもしれない、と思った。そういえば2025年は、フィシャー＝ディースカウの生誕100年だった。

5月9日は日本歌曲協会の「春のステージ」を聴いた（渋谷区文化総合センター大和田さくらホール）。同協会の創立20周年記念であると同時に「故・深海さとみ名誉会員を偲んで」という副題も持つ。「邦楽器とともに」というこの協会の歴史は、深海さとみと共にあった。通常接点を持たない洋楽と邦楽の「歌」の分野での重要な接点として、この協会の持つ意義は大きい。

5月13日は「B→C」でのソプラノの高橋維を聴く（東京オペラシティ リサイタルホール）。既に二期会のオペラ公演でも活躍する高橋だが、このシリーズらしい「攻め」の

プログラムで、オペラ公演では伺い知れない高橋の違う側面に出会えた。二期会のオペラ公演が、高橋のこのような多彩な素養を生かし切れていたのか、と改めて思う。

6月7日に第22回二期会日本歌曲研究会演奏会を聴いた（旧東京音楽学校奏楽堂）。12人の歌手が、それぞれに選んだ様々な作品を演奏したが、正に「日本語歌唱の問題点の見本市」のような混沌たる状況だった。歌とは何か、言葉とは何か、という根本的な問題提起にまでその原因は遡れるかもしれない。

7月22日は、恒例の「新作歌曲の会」に出掛けた（東京文化会館・小）。今回で第25回を数える。鈴木静哉の作品が心に残った。

10月4日にはベテラン・バリトンの末吉利行のリサイタルを聴いた（きらら鎌倉ホール）。「私の音楽人生」と題した多彩なプログラムを、盟友とも呼ぶべき花岡千春のピアノが支えた。

10月7日の「B→C」に、テノールの山本耕平が登場した（東京オペラシティ リサイタルホール）。山本も既に二期会を始めとするオペラのシーンで存在感を示しているが、このシリーズの楽しみは、どのようなプログラミングを組み立てるかだ。ペルクの「ルル」の1曲では、夫人の高橋維の助演もあり、様々な可能性が展開された。

10月15日の東京文化会館主催公演「プラチナ・シリーズ」に登場したのはイタリアのテノール、ルチアーノ・ガンチ。華麗で燦然たる歌唱は、「イタリアのテノール」の魅力を満喫させてくれた。「アイダ」や「トゥーランドット」もレパートリーにしているそうだが、本領はリリコのレパートリーで発揮されるように見える。アンコールで歌われた「誰も寝てはならぬ」と「女心の歌」での歌唱が、それを見事に証明していた。20世紀では厳然と守られていた歌手のレパートリーの区分が、イタリアでも消失しているのを、改めて残念に思う。

10月29日、ソプラノの針生美智子のリサイタルを聴く（古賀政男音楽博物館けやきホール）。モーツァルトシンガーズジャパンの仲間でもあるバリトンの宮本益光が賛助出演し、司会も務め、ピアノの高田恵子が支えた。前半がモーツァルト、後半がドニゼッティの「ルチア」からのナンバーと、オペラを主戦場とする針生らしいプログラム。良くトレーニングされた声と、真摯な表現によって、心地良い時間を

堪能した。

フランスの名ソプラノ、ナタリー・デセイが、フィリップ・カサールと共に日本でのフェアウエル・コンサートを行なった（11月6日、東京オペラシティ）。冒頭のモーツァルト・ステージでは「フィガロの結婚」から、バルバリーナ、スザンナ、ケルビーノ、伯爵夫人のアリアを、カサールの雄弁にして洒落なアレンジで曲間を繋ぎながら織り上げた。続くフランス歌曲のステージ、後半の英語のプログラムと、プログラミングの熟考された内容と、それを香り高く演奏へと転化して行くデセイとカサールのステージがもう見られなくなるという寂しさを、今改めて噛み締めている。プログラミングもまた、芸術家としてのセンスが鮮やかに反映される。この稀有な芸術家の「お別れコンサート」を聴きに来なかった（状況が許さず来られなかった、のではなく）声楽家は、声楽家として接するべき大事な「何か」を見逃したことになるだろう。

11月21日にはソプラノの森野美咲が、ヘルムート・ドイチュとリーダー・アーベントを開いた。日本人声楽家が広い第一生命ホールでリサイタルを開くというのは、昨今では余り無いだろう。前半にR.シュトラウス、後半にリスト歌曲をヘルマン・ロイター作品の前後の配するという重厚なプログラムを、油の乗り切った森野の歌声が鮮やかに紡ぎ上げる。リストの歌曲の魅力にこの夜、多くの聴き手は気付いたかもしれない。

ここで取り上げるべき公演か定かではないが、12月12日には古楽団体である濱田芳通とアントネッロの第20回定期演奏会を聴いた（横浜みなとみらい小ホール）。中世ブラヌス写本による「カルミナ・ブラーナ」というプログラムを、術学趣味に陥らずに、良い意味でのエンターテインメント性に満ちたステージで繰り広げた。演奏の質は言うに及ばず、ステージングや字幕の工夫など、現代の日本に生きる我々を愉ませてくれる工夫に溢れた時間が紡ぎ出される。最近のアントネッロの充実が反映された公演を堪能した。

国土潤一（こくど・じゅんいち）

昭和31年東京生まれ。東京芸術大学声楽科、同大学院修士課程修了後、旧西ドイツ国立デトモルト音楽大学に留学。声楽を伊藤亘行、川村英司、山路芳久、テオ・リンデンバウム、リヒャルト・ホルム、ドイツ語舞台発音法をハンス・クールマン、合唱指導法を田中信昭に師事。帰国後の1988年から演奏活動の他に、音楽評論を「レコード芸術」誌を出発点に開始し今日に至る。「歌の本」を2021年に音楽之友社より上梓する。